

「映画と朗読」から平和な明日を・・

7月20日（土）

10:00 オープニング 中尾 凜

10:10 長崎居留地男声合唱団

長崎女声居留地合唱団オルテンシア

2007年秋、長崎と長崎外国人居留地を愛する男達が集まり結成された男声合唱団。「音楽を通したまちづくり」を目的とし、2011年に（後に長崎居留地女声合唱団オルテンシアに改名を結成した）

「サイレントフォールアウト」

伊東英郎監督作品/2023年・96分

1951年、米国ネバタ核実験場で大気圏内核実験が始まった。計100回の実験は、アメリカ大陸を放射能汚染させた。放射能汚染に向かう30人の証言と文書から、いまなお潜む「サイレントフォールアウト」見えない放射降下物の実態をあぶりだす。

「原子雲の下に生きて」山里小学校

昭和20年8月9日、山里国民学校（当時）では職員・児童、約1300名が原爆で亡くなった。毎年「原子雲の下に生きて」を語り継ぎ、「あの子」を歌ってきた。

「原爆句抄」（松尾あつゆき）

深堀中学校

長崎で被爆した松尾あつゆきは、最愛の妻と3人の子どもを炎天下で荼毘に付し、その日起こった事を日記に書きとめ、200の原爆句を書いた。作者の気持ちに思いを馳せ、心を込めて朗読します。

朗読劇「八月の空に」 淵中学校

21世紀後半の長崎、ついに「被爆の証人」がいなくなる日が訪れた。中学生のマコトは、そのニュースを伝えるテレビを見ながら、長崎の過去と未来に思いを寄せていく……。

被爆体験の継承と平和の願いをテーマに構成した朗読劇。

14:00

「平和への誓い3」 天とうむし5

長崎市内の高校放送部員が集合。毎年8月9日の平和式典において、被爆者の方々が読まれた「平和への誓い」を今噛み締めたいと思います。

15:20

「ナガサキノート」 II

朗読ユニット・ソレイユ

20代、30代の若手新聞記者が被爆者の体験談を取材した「ナガサキノート」。その中の数編を、若手記者と同世代の夫婦が昨年に引き続きふたりで朗読します。

朗読ユニット「りぶる」

「長崎医科大学復員青年医師による巡回診療班被爆者のために全力奉仕した医学徒の手記」

「城山国民学校の物語」「母の手記～戦争は絶対いや～」

16:10

「閃光に奪われた未来」 KUSUNOKI

爆心地周辺にあった学校の生徒たちの被爆前の日常、被爆体験を中心に、原爆で未来を奪われた学

生たちへ追悼の意をこめて朗読します。

17:00

7月21日（日）

「二重被爆」

青木 亮監督作品/2006年・60分

昭和20年（1945年）8月6日広島、8月9日長崎に原爆が投下された。両市で死者は20万人を越えた、無差別な殺戮が行われた。そして広島と長崎で二度被爆した「二重被爆」者は数千人（推計）いたと言われている。二重被爆者7人の被爆体験の証言を基に、中国、フランス、そしてアメリカで取材した「二重被爆」第一作。

「つつきれ下駄とズック」（鶴文乃）

平林智子

「ガタガタ医院」の診察室のガラスケースの中には、鼻緒の切れた下駄とズックが大事に入れてある。「そのズックが欲しい。」とチャ君が言った。「あれはやれない。」とぼつりと答えたつつきれ先生！そのわけは……

「この子を残して」（永井隆）

KTN長崎 吉井誠・円田智子

被爆80年に向けて、放送とは別の形で何か始められないか…そんな思いから出演を決めました。日ごろはニュースを担当する2人が永井博士の家族を残して逝かなければならない痛切な思いを、朗読でお届けします。

「ヒロシマからあなたへ」

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

被爆体験記朗読ボランティア

私達の朗読会は参加者にも原爆詩を読んでいただくユニークなもの。今回、時間の関係でそれはできませんが、自分ならどれを…と思いながらお聞き下さい。体験記2編を日本語で、原爆詩4編を日本語、英語で朗読します。

「原爆前後」IV 長崎大学放送研究会

「原爆前後」は1968年から三菱重工造船設計部の有志が発行した小冊子です。孫の世代に書き遺した700篇の手記の中から、昨年に引き続き伝えます。

13:20

原
前
後

14:00 「被爆と戦争をどう伝えていこうか」
トーク 山川剛⇨諸岡浩輔・渡邊紗羽



15:30

「道」（林京子作）海の会



16:20



「ナガサキのいたみ」

正しい日本語研修会

日本語の正しい音声表現をめざして発足した朗読グループも18年目になります。幅広い世代が楽しく学んでいます。

今年は長崎の詩人の作品を朗読します。

「夏の雲は忘れない」Nの会

「Nの会」は、戦後70年を機に結成した、長崎県高校放送部OB有志の会です。今年は原爆朗読劇『夏の雲は忘れない』から、長崎に関わりのある詩や文章を取り上げて朗読します。

17:10



朗読監修 天野紘 プログラム構成 稲塚秀孝 司会進行 渡邊紗羽・本城舞

アクセス

長崎原爆資料館ホール

〒 852-8117

長崎市平野町7-8

JR長崎駅から 路面電車

1, 3番系統赤迫行

長崎バス 1, 2番系統

原爆資料館下車、徒歩5分



朗読の上映時間は前後する事があります。余裕を持ってご来場ください。

「人間の世界に核はいらない」

山口 弘（1916～2010）からの提言

結論すれば、核であろうが、これを平和的に使うと言いますけども技術的に問題があって、爆発したり。だから私が思うのは、核は人間の世界にあってはいけないもの、平和的に利用すると言っても問題がある。今の技術では、材料も材質も、そういうものでは防止できない、技術の限界がある、と私は自分の経験から知っている。だから、核が無くななければ、繰り返すだけなんですね。そして人類が滅亡に近づいているというふうに私は思っています。それ故に、自分の命があるうちに、自分がなぜ生きされているのか、そういうことを"叫ぶ"宿命的なものを持っておったんじゃないかな、と思います。（2009年3月16日、93歳の誕生日に）



山口弘さんは戦前、戦後と三菱重工造船設計部に勤務し、主に小型経済船の設計に携わっていた。